

コロナ禍における体育授業の実際

小川 浩平（鳴門教育大学大学院）

1. 目的

本研究は、コロナ感染拡大の現状において、体育授業をどのように実践しているのか、現職（主に体育科を研究教科としている）の先生方にインタビューし、コロナ禍における体育授業への取り組みについて整理した。そして、インタビュー内容に共通部分を見つけ、with コロナ、after コロナの体育授業実践に活かすことを目的とした。

2. 研究方法

徳島市内の小学校の先生方に、5月下旬の一斉休業明けからの体育授業の様子や工夫、制限等についてインタビューを行った。インタビューの方法は、対話の流れに合わせて質問を変化させる非構造的インタビューで行い、分析にはKH Coder（樋口2020）を使用し、コーディングファイルに基づいた共起ネットワーク図の描画からインタビュー内容を解釈し、整理した。

- 1) 研究対象：徳島市内の小学校に勤務している体育主任や体育を研究教科としている6人の教員
- 2) データ収集法：非構造的インタビュー
- 3) 分析方法：テキスト分析用ソフトウェア
KH Coderによるテキストマイニング法

3. 結果と考察

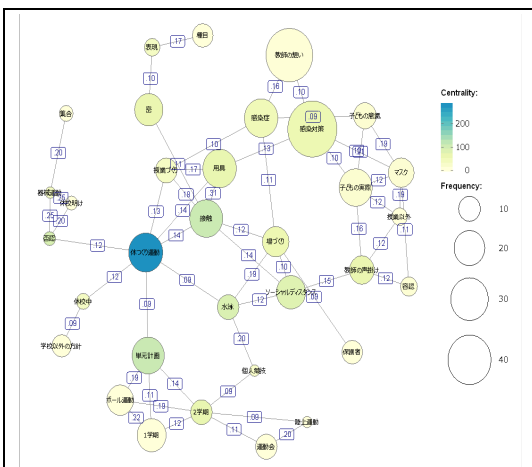


図1 共起ネットワーク（インタビュー全体）

図1は、6名のインタビューデータ全てをコーディングファイルに基づいて、共起ネットワーク図に描

画したものである。「体づくり運動」が強い中心性を示し、「単元計画」が共起していることから、一斉休業明けの体育授業では、年間計画を入れ替え、「体づくり運動（遊び）」から始めたことが分かった。また、「用具」と「感染対策」が関連していることから、「用具」の共有を防ぐことによって、コロナ対策を行っていたことが分かった。このような分析を通して以下の3つのことが見えてきた。

①単元計画の入れ替え

休校明けに体づくり運動を実施し、ボール運動など接触が高くなる領域を2学期以降に計画し直している。

②学校単位での取り決め

文部科学省の指示に準ずるところもあったが、最終判断は学校ごとに単元計画の決定や授業での注意事項を決めている。

③コロナ禍での授業づくり

場の工夫や物の共有を避けることなどで、感染対策を行っている。一方で、授業内での子ども同士の関わりを制限することに限界があることも示唆している。

4. 結論

コロナ禍において多くの制限がある中、運動から子どもを遠ざけないように、様々な工夫を凝らしながら体育授業を実践していた。水泳運動の授業では、従来はあまり使用しないコースロープを張り、密を避ける工夫がされていた。After コロナに関しては、新型コロナ感染拡大が収まったとしても、従来のようなペア学習や、人と人が長時間接触するような活動は避け、単独で取り組むことができる運動を取り入れる工夫が必要であったり、「物を触った手で顔を触らない」「授業後に手を消毒する」等、感染対策の意識付けも大切であると考えられる。

5. 主な参考文献

- 1) 樋口耕一 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版 2014